

愛知県における高齢者の公共図書館利用に関する研究

谷本道子・鈴木香織*

A Study on the Use of Public Library in Aichi Prefecture by Senior Citizens

Michiko TANIMOTO and Kaori SUZUKI

はじめに

世界最高水準の平均寿命が定着した日本で、近年、生涯学習のための制度の充実が図られている。学齢期を過ぎても、さらに教養を高めたり、自己の能力を十分に発揮するための学習を可能にするため、高等教育機関による社会人の受け入れが促進されたり、愛知県でも県民大学講座等様々なプロジェクトが展開されている。

学習と図書館の関係については従来主として子どもの利用についての研究が多かったが¹⁾、こうした状況の中で本研究は、生涯学習にとって重要な役割を担うことが期待される公共図書館をとりあげ、高齢者の利用状況、建築や設備の面での高齢者や車椅子利用者に対する配慮、車椅子利用者の入館や館内施設の利用の可能性、図書館に出向けない場合に有効な自動車図書館(ブックモービル)の実施状況、さらに、各図書館の高齢者利用に対する取り組みや今後の計画等について、現状を明らかにし、生涯学習の場としての公共図書館の整備に向けての知見を得ようとするものである。

方 法

図書館調査委員会が編集し、日本図書館協会が発行する「日本の図書館1995」に掲載された愛知県下の公共図書館全78館から児童図書館1館を除き、1996年に開館した1館を加えた計78館に対し、依頼・回収とも郵送によるアンケート調査を1996年11月から12月に実施した。あわせて、各館の設計図書およびパンフレット記載事項等も資料とした。回収数は72館で、回収率は92.3%である。

結果と考察

愛知県内の公共図書館を96年開館のNa79を含めて表1に示す。この79館のうち、Na53は児童図書館であるため対象からはずし、Na7/10/32/43/62/76を除く72館について検討する。

1. 利用者に占める高齢者の割合

殆どの図書館から一月当たりの平均利用者数の回答が得られ、その結果を表1に示した。その中で高齢者が占める割合をみる。図書館により、年齢別集計をする館としない館がある上、する場合にも集計上の年齢区分が異なるため、一律には示せない。年齢別集計の回答が得られ

*旭化成ホームズ株式会社

表1-1 愛知県内の公共図書館一覧及びその利用者数

No	名 称	蔵書数 (千冊)	延床面積 (m ²)	複合 施設	構造	階 数		障害者	ボラン ティア	視聴覚	児童	利用者数 (人/月)
						地上	地下					
1	愛知芸術文化センター愛知県	846	19604					障	ボ	視	児	87122
2	県勤労会館労働図書資料室	51	373	複	R C造	2	4			視		735
3	安城市中央	467	3945					障	ボ	視	児	11356
4	一宮市立豊島	339	2916		R C造	3		障	ボ	視	児	17000
5	稲沢市立	119	1027					障	ボ	視		5019
6	犬山市立	167	4961	単	R C造	2			ボ	視	児	34405
7	岩倉市	127	2484					障	ボ	視	児	
8	大府市中央	122	1137						ボ	視	児	5432
9	岡崎市立	314	2476	単	R C造	3	1	障		視	児	集計なし
10	尾張旭市立	104	1336						ボ	視	児	
11	春日井市立	316	1559					障	ボ	視	児	18227
12	同東武市民センター	109	728	複		3			ボ		児	6997
13	蒲郡市立	211	1986					障	ボ	視	児	19000
14	刈谷市中央	408	5509					障	ボ	視	児	14686
15	同城町分館	71	1736						ボ		児	1071
16	江南市立	88	962	単	R C造	3		障	ボ	視		6255
17	小牧市立	210	2224					障	ボ	視	児	集計なし
18	小牧市東部市民センター	66	530	複	R C造	2	1			視	児	4900
19	同北里市民センター	25	181							視	児	集計なし
20	新城ふるさと情報館	74	2021			2			ボ	視	児	2640
21	瀬戸市立	225	1559	単				障	ボ	視	児	1596
22	高浜市立	102	1105			2			ボ	視	児	6043
23	知多市立中央	184	3229	単	R C造	2	1	障	ボ	視	児	7838
24	知立市	120	2477	単	R C造	2			ボ	視	児	7101
25	津島市市立	142	802			2		障		視	児	5165
26	東海市立中央	203	2410		R C造	2		障	ボ	視	児	16000
27	常滑市立	152	1447					障	ボ	視	児	3500
28	豊明市立	174	2900			2		障	ボ	視	児	1823
29	豊川市立	191	2386						ボ	視	児	8600
30	豊田市立	549	2393					障	ボ	視	児	25000
31	豊橋市中央	435	5655	単	R C造	3	1		ボ	視	児	17983
32	同配本センター	218	250	単								
33	名古屋市鶴舞中央	797	11285	単	S R C造	3	1	障	ボ	視	児	76475
34	名古屋市熱田	126	1691	単	R C造	2		障	ボ	視	児	24939
35	名古屋市北	121	1140	単	R C造	2		障	ボ	視	児	12000
36	名古屋市千種	86	1106	単	R C造	2		障	ボ	視	児	10102
37	名古屋市天白	89	1128	複	R C造	4		障		視	児	16135
38	名古屋市中川	135	1148	単	R C造	2		障	ボ	視	児	17957
39	名古屋市中村	89	1324	複	S R C造	3		障	ボ	視	児	15128
40	名古屋市西	257	2364	複	R C造	2	3	障	ボ	視	児	16492
41	名古屋市東	94	不明		R C造	3		障	ボ	視	児	25841
42	名古屋市瑞穂	96	1181		R C造	2		障	ボ	視	児	集計なし
43	名古屋市緑	92	1201		R C造	2		障	ボ	視	児	
44	名古屋市港	87	1553		R C造	3		障	ボ	視	児	10407
45	名古屋市南	147	1631	複	S R C造	3		障	ボ	視	児	17000
46	名古屋市名東	120	1294		R C造	2		障	ボ	視	児	31704

表1-2 愛知県内の公共図書館一覧及びその利用者数(つづき)

No	名 称	蔵書数 (千冊)	延床面積 (m ²)	複合 施設	構造	階 数		障害者	ボラン ティア	視聴覚	児童	利用者数 (人/月)
						地上	地下					
47	名古屋市守山	89	1161		R C造	2		障	ボ	視	児	22000
48	西尾市立	160	2721			3			ボ	視	児	7714
49	日進市立	106	1762					障	ボ	視	児	
50	半田市立	221	2704					障	ボ	視	児	26000
51	同亀崎	56	291						ボ		児	7333
52	尾西市立	162	1835					障	ボ	視	児	6350
53	尾西市児童	30	275							視	児	
54	碧南市民	201	4327					障	ボ	視	児	8053
55	同南部分館	50	486						ボ	視	児	1945
56	豊田加茂広域市町村圏移動	96	370						ボ		児	集計なし
57	赤羽根町文化ホール	19	341						ボ	視		400
58	阿久比町立	91	1429			2			ボ	視	児	3138
59	渥美町立	58	1693							視	児	2000
60	一色地域文化広場学びの館	75	772		R C造	2		障	ボ	視	児	2158
61	大口町立	43	614								児	2500
62	蟹江町立	45	372						ボ	視	児	
63	吉良町立	66	670					障	ボ		児	1610
64	佐屋町立	44	2012							視	児	96204
65	師勝町	99	3145					障	ボ	視	児	7453
66	祖父江町中央	37	2287		R C造	2				視	児	4700
67	武豊町立	132	2740		R C造	2			ボ	視	児	14000
68	東郷町立	85	5082						ボ	視		4858
69	長久手町中央	73	4201						ボ	視	児	6933
70	西春町	68	1082	複	R C造	3			ボ	視		4016
71	額田町立	43	562							視	児	650
72	幡豆町立	40	883							視		1450
73	東浦町中央	123	2634		R C造	2		障	ボ	視	児	8367
74	扶桑町	98	1573		R C造	2			ボ	視	児	5659
75	平和町立	57	751						ボ	視	児	3000
76	三好町立中央	78	868						ボ	視	児	
77	美和町	40	732	複						視		3500
78	弥富町立	125	1978	複	R C造	3			ボ	視	児	3250
79	幸田町立				R C造	2	1					4089

たのは34館である。31歳以上で区分する館が1館あり、31歳以上が全利用者に占める割合は54.5%である。以下同様に、当該年齢層が全利用者に占める割合を示す。51歳以上で区分する館が1館あり37.3%である。60歳以上で区分する館は12館あり、12館の平均は10.1%である。61歳以上で区分する館は3館あり、3館の平均は7.3%である。65歳以上で区分する館は15館あり、15館の平均は10.3%である。66歳以上で区分する館は2館あり、2館の平均は2.6%である。さらに、重複して70歳以上でも区分する館が2館あり、平均3.4%である。これらから、60～65歳以上の高齢者の割合は概ね1割強とみられる。

学齢期には学校図書館を利用し、多忙な就業期には図書館利用の機会が少ないのが現実であるのに対し、比較的時間に余裕のある高齢者が地域の公共図書館を利用しやすいことを考えると、この割合は低いといえる。

2. 建築と設備

2-1. カウンター

車椅子利用者用カウンターを設置しているのは7館(9.7%)で、そのうち、健常者兼用としているのは3館(4.2%)である。

一般のカウンターでの利用者の姿勢を表2に示す。立って利用するのが69館(95.8%)にのぼる。利用者がカウンターにいる時間は長くはなく、健常者にとって椅子に腰掛けることはかえって煩わしいともいえる。利用者が全てのカウンターで腰掛ける図書館は皆無であり、利用者が全てのカウンターで立って利用する図書館が大半である。立つカウンターと腰掛けるカウンターの両方を備えているのは2館(2.8%)にすぎない。

表2 利用者の姿勢

利用者姿勢	館	%
立つ	69	95.8%
腰掛ける	0	0.0%
両方	2	2.8%
不明	1	1.4%
計	72	100.0%

表3 館員の姿勢

館員姿勢	館	%
立つ	7	9.7%
腰掛ける	61	84.7%
両方	3	4.2%
不明	1	1.4%
計	72	100.0%

つぎに、カウンター対面の館員の姿勢を表3に示す。立って対応するのが7館(9.7%)あるが、パソコンを使ったり、読み書きをする仕事が多いため、腰掛けるのが61館(83.3%)を占める。つまり、ひとつのカウンターをはさんで館員は腰掛けて、利用者は立って使用するのが大半である。

表4 カウンター高さ

高さ (cm)	館	%
50	1	1.4%
63	1	1.4%
65	1	1.4%
68	1	1.4%
70	37	51.4%
71	2	2.8%
72	2	2.8%
73	2	2.8%
75	13	18.1%
78	1	1.4%
80	1	1.4%
90	2	2.8%
93	3	4.2%
100	1	1.4%
70と75	1	1.4%
73と93	1	1.4%
不明	1	1.4%
計	72	100.0%

表5 カウンター奥行

奥行き (cm)	館	%
40~49	1	1.4%
50~59	8	11.1%
60~69	18	25.0%
70~79	28	38.9%
80~89	6	8.3%
100~199	4	5.6%
200以上	4	5.6%
45~75	1	1.4%
不明	1	1.4%
計	72	100.0%

そうした図書館のカウンターの利用者側からの高さを表4に示す。70cmが37館(51.4%)と最も多く、ついで75cmが13館(18.1%)である。70cmと75cmの両方をもつ館を含め70~75cmのカウンターを使うのが57館(79.2%)を占める。平均値は73.6cmである。70歳代女性が立って下方に腕を伸ばすと床からの高さが約52cm、かるく曲げて約72cm、車椅子利用者についても70cm程度が使いやすい高さであるとされていることから、これらのカウンターは適当な高さとみられる。しかし他は50cmから1mの間でばらついており、低すぎるものも高すぎるものもみられる。立っての使用と腰掛けての使用のための2つの高さのカウンターを備えた館は2館(2.8%)である。

次にカウンターの奥行きを表5に示す。70~79cmが最も多く28館(38.9%)である。特に70cmが20館で最も多い。50~89cmで60館(83.3%)を占める一方、1m以上が4館(5.6%)、2m以上が4館(5.6%)みられるなど、奥行き寸法はさまざまである。平均は85.4cmである。図書館を使い慣れない利用者にとっての館員に話しかけやすい奥行きや、館員と利用者が効率よく使える奥行き等が試みられているものとみられる。また、多くの図書館で入り口付近にカウンターが設けられており、カウンターはその図書館を印象づける役割も果たしていると思われる。

2-2. 閲覧席

閲覧席について、車椅子利用者専用席を設けているのは13館(18.1%)である。しかし、一般の閲覧席から離れた位置に1台だけが置かれているところもみられ、レイアウトに配慮が必要であろう。また、閲覧機の形状によっては健常者と兼用できることから²⁾特別には設置しない所も多い。

2-3. 便所

車椅子利用者のための便所を設置しているのは53館(73.6%)である。

こうした便所では、便器周辺に車椅子動作空間と介助空間をとることや、手摺りを工夫すること等が必要とされ、健常者用に比べ大きな面積が必要である。狭さの故か約4館に1館が未設置である。

2-4. 館内移動・書架間隔等

車椅子で館内をまわることが可能かどうかをみる。まわれるとするのが、38館(52.8%)、まわれないとするのが33館(45.8%)、不明1館(1.4%)である。

館内をまわるのに支障があるとする33館について、どこに支障があるのかを複数回答でみる。「図書館が複数の階にあり、上階に上がれない。階段のみでエレベーターがない。」が最も多く21館(全体の29.2%)に昇る。「書架と書架の間が狭い」が9館(12.5%)、「段差がある」と「書架が積層書架である」が各2館(2.8%)ある。以下はそれぞれ1館があげた支障で、「書架と机の間が狭い」、「通路が狭い」、「ドアが重い」、「便所が使えない」、「主に児童が使用する場所ではあるが、お話コーナーの中に入れない」「複写コーナーの利用が困難」等である。エレベーターの設置により解決されるものが多い。中には、車椅子利用者の要請があれば荷物用のエレベーターを使う図書館もあるが、利用者と館員の双方の負担は大きいと思われる。書架と書架の間隔、書架と机の間隔、通路幅等の狭さも11館(15.3%)であげられており、これについても全体にゆとりのなさがうかがえる。

2-5. 出入口

車椅子利用者専用出入口があるのは23館(31.9%)である。

専用出入口のあるなしに関わらず、車椅子利用者が一人で来館しても館内に入ることが可

能かどうかを表6に示す。可能が63館(87.5%)、誰かが補助をすれば可能が6館(8.3%)、不可能が2館(2.8%)である。単独では入館できないものが1割程度みられる。その理由の大半は、ポーチ部分の段差にあり、スロープの設置で多くは解決されるものとみられる。これについても敷地面積のゆとりのなさがうかがえる。

また、開閉操作のいらぬ自動扉が車椅子使用者の通過する出入口には適当であるが、直立歩行者だけでなく車椅子の接近も感知するものであることが必要である。

2-6. 駐車場

駐車場を設置しているのは66館(91.7%)である。設置していない5館(6.9%)は名古屋市内及びその近郊のものである。

駐車場がある図書館の中でも、名古屋からかなり離れた市町では他の施設と併用する合同の駐車場が多く、台数の平均は75.3台である。車椅子使用者専用の駐車場を設置しているのは、40館(全体の60.6%)であり、その平均台数は1.65台であった。こうした駐車場は、乗降通路幅が120cm以上ある事や、出入口近くにあること等が必要であり、これについても出入口周辺のゆとりが必要である。

3. 自動車図書館(ブックモービル)

さまざまな理由により図書館に行きたくても行けない高齢者にとって、自動車図書館は有効である。しかし実施している図書館は18館(25.0%)と少なく、十分に浸透していないのがわかる。実施している18図書館について、自動車図書館の状況をみる。

表7 自動車図書館(BM)台数

台数	館	%
1	14	77.8%
2	3	16.7%
3	1	5.6%
計	18	100.0%

表8 BM1台当り積載冊数

冊数/台	台	%
1~	7	30.4%
2001~	11	47.8%
3001~	4	17.4%
4001~	1	4.3%
計	23	100.0%

自動車図書館(以下BM)に使用する車の台数を表7に示す。1台が14館(77.8%)で最も多い。2台が3館(16.7%)で、3台は広域市町村圏移動図書館の1館のみである。平均台数は1.28台である。

1台当たりの積載図書冊数を表8に示す。2千~3千冊が11館(47.8%)で最も多い。1台当たりの平均冊数は2491.3冊である。しかしこれについては自動車図書館の規模により800冊から13,000冊までかなりの開きがある。

巡回先数を表9に示す。1~20箇所が8館(44.4%)、31~40箇所が5館(27.8%)と多い。平均は35.7箇所であるが、これについても、その図書館の設立目的や地域の状況などによって、3~183箇所と、大きな開きが見られる。

担当職員数を表10に示す。自動車数1台が多いことから2人が7館(38.9%)で最も多く、1台を5人までで運営している。1人のところも2館(11.1%)みられる。

表9 BM巡回先数

巡回先(箇所)	館	%
1～	3	16.7%
11～	5	27.8%
21～	1	5.6%
31～	5	27.8%
41～	1	5.6%
51～	2	11.1%
61～	1	5.6%
計	18	100.0%

表10 BM担当職員数

担当職員	館	%
1	2	11.1%
2	7	38.9%
3	1	5.6%
4	2	11.1%
5	2	11.1%
6	3	16.7%
7	0	0.0%
8	1	5.6%
計	18	100.0%

巡回間隔を表11に示す。ほぼ2週間が7館(38.9%)、ほぼ1箇月が8館(44.4%)で、この2つで大半を占める。

特に高齢者を対象にした巡回先について表12に示す。老人ホームが3館、病院が1館、市民館が1館あるだけで、特になしが13館(72.2%)と大半を占める。多くの図書館で自動車数が1台であることから、全年齢層を対象とした選書にならざるを得ず、積み替えをすることも困難な状況がうかがえる。

表11 BM巡回間隔

巡回間隔	館	%
ほぼ3日	1	5.6%
ほぼ14日	5	27.8%
ほぼ15日	1	5.6%
ほぼ17日	1	5.6%
ほぼ30日	5	27.8%
ほぼ35日	3	16.7%
ほぼ40日	1	5.6%
ほぼ90日	1	5.6%
計	18	100.0%

表12 BM高齢者対象巡回先

高齢巡回先	館	%
老人ホーム	3	16.7%
病院	1	5.6%
市民館	1	5.6%
特になし	13	72.2%
計	18	100.0%

4. 高齢者の利用に関する現状と今後の計画

図書館長宛に依頼した今回の調査では、高齢者の図書館利用についての取り組みの状況や意見等を多くの図書館に記入いただいた。以下に列記して紹介する。

- ・大活字本コーナーを設置している。
- ・現在は特に高齢者の方専用のものはないが、近々新館建設の予定があり、その時には高齢者や身障者の方にとって利用しやすいような図書館を目指したいと考えている。
- ・生涯学習施設という視点で図書館を考えて行きたい。
- ・大型活字本240冊を所蔵している。ルーペ3本を備えている。
- ・公共交通機関などを利用しなくても徒歩10分くらいの範囲に図書館があるのが望ましいと思います。それには、一市一館ではなく分館が多くあれば良いと思います。また図書館まで来られない高齢者へは宅配サービスの方法もあります。館内サービスで老人対象の読み聞かせ会等も開催しても良いでしょう。大活字本の収集も必要だと思います。
- ・町に図書館が1館で地区公民館への配本等がないため、遠い地区の高齢者は不便かと思いません。しかし、現在の人員体制でできる範囲として老人ホームへの月1回の団体貸出を行って

います。また、大活字本の購入も行っています。

- お休みカレンダー等パンフレット類を大きな字のものを別に作成すると喜ばれるが、なかなか手がまわらないことが多い。
- 地域的に比較的高齢者が多いので、図書館の事業としてお年寄りを対象とした朗読会を平成3年度から開始した。隔週の水曜日(第1、3)に開催している。参加者は4、5名である。
- 自力での来館が不自由な人へのサービスをどの様に考えて行くか。
- 学生の休暇中、高齢者の利用が少なくなるので机、椅子などの確保を考える必要がある。
- 大活字本の蔵書量を多くしていきたい。
- 施設面において高齢者(身体障害者)を考慮した点は、閲覧席及び受付に拡大鏡を設置すること、車椅子やベビーカー同志ですれ違いができる書架間の広さをとること、エレベーターなどのスイッチを低位置に取り付けること、地下駐車場からエレベーターを利用して直接館内へ入館できることである。
- 超高齢化社会の進行に対応し、長寿社会向けの年金、医療、健康、福祉、生きがいつくり等多くの図書資料が刊行されており、地域住民の生涯学習の場として活用いただくため、図書の充実に努めていますが、今後シルバーコーナーなど考えることが必要と感じています。
- 資料検索方法がOA化されているので、高齢者には不利となっています。
- 目が見えにくくなるため、大活字本の充実ははかる必要がある。
- 図書室が2階にあるので不便だと思う。
- 拡大鏡等があるといいと思う。大活字本の利用も必要。
- 現在、市の都市計画課で「犬山市人にやさしい街づくり基本計画」を策定中であり、第1段階として公共施設の現状点検作業などの調査把握を終えた。当然、図書館も対象施設となっているが、そのほかの施設についても高齢者(障害者なども含む)が利用しやすい施設とは何かを、計画を作成するに当たって考慮している。
- 大活字本を購入し、利用していただく。
- 大活字本の収集に一層努めていく方針である。
- 高齢者だけでなく全般的に利用者が限定されている。読書は嗜好的なものであるため、いくらPRしても読まない人は利用しない。更に、高齢になって自分の時間が持てるようになったとしても、急に読書に親しむかといえはそうでもない。今後とも文化ホール図書室利用の促進をはかるが、新たな高齢者の方の利用は期待できないと思われる。
- 高齢者利用は貸出のみの層と長時間滞在層に分かれているように観察される。資料的には意識して収集しているが、長時間滞在が快適なような設備が構造的にとれないでいる。そのほかの条件整備として大活字本、館内貸し出し用ルーペ、補聴器等があります。
- 大型活字本を充実させていきたい。
- 大活字本コーナー 約1,000冊、老眼鏡、拡大鏡の設置
- 高齢化社会を迎えて高齢者の図書館利用はますます増加する傾向にある。図書館サービスは利用対象別に細分化していったきめの細かいサービスを展開する必要がある。高齢者サービスはその1つの重要な分野であり、以前より少しは充実、向上しているが全体としては、まだ認識が浅く十分なサービス体制が整備されていない。
- 生涯学習時代に入って久しいものがありますが、従来から職場、家庭は言うに及ばず、個人々の学習の必要性が言われ続けております。指摘の高齢者の問題も来る21世紀のはじめから老人社会となっていくことはまちがいのないことであります。そのため図書館としましても

従来からの障害者の面からの施設づくりや改善ではなく新たな”老人の利用”という大きなターゲットにむけて、今後は施設、資料の両面からの問題解決に取り組んで行こうとしているところであります。

- ・大型活字本の購入で利用者、特に高齢者の利用が伸びている。あとは特別に高齢者ということで区別せず。
- ・利用のし易さという点では、1階部分に利用スペースが集中している方が使い易いと思う。
- ・近年高齢者の利用が増加しているが、高齢者は資料を借りるだけでなく、滞在時間が長いので読書環境の整備に今後留意していきたい。
- ・当館は約30年前の建築物であり、昨今の高齢化時代にはそぐわない面があり、部分的には玄関スロープ、障害者用トイレ等は設置しましたが、2階へのエレベーターの設置スペースが確保できないものについては、改築計画が必要。
- ・高齢者のみならず、市民が利用しやすい図書館は、身近にあってこそ初めて機能するものです。遠くにある建築物よりたとえ月1回でも身近な場所に来る自動車図書館の方が便利と考える人が多いように思います。(中略)ハード面の設備も大切ですが、ソフト面での配慮も検討、研究課題でしょう。

要 約

公立図書館の利用者に占める高齢者の割合は概ね1割強とみられる。

その建築と設備をみる。カウンターについては高さからみて立っても椅子または車椅子でも使用できる程度になっている。閲覧席についても机の形状により健常者との兼用が可能である。約4分の1には車椅子用便所がない。出入り口では9割が車椅子使用者の単独での入館が可能であるにもかかわらず、館内を自由にまわれるかについては、半数弱で不可能である。その最大の理由は、2階建て以上のものが多いにもかかわらず、エレベーターが設置されていない所が多いことである。その他、書架と書架の間隔や通路が狭いこと、床の段差、積層書架が用いられていること等が支障になっている。自動車図書館は4分の1の図書館で実施されているが、高齢者への対応はまだ少ない。

高齢者の利用に関する現状と今後の計画についての自由記入からは、大活字本の充実、拡大鏡の貸し出し、朗読会のような催し等、積極的な取り組みが多くみられた。

建築設備面の改善と、運営上の配慮、配本や移動図書館の導入等が、高齢者の利用の拡大につながると思われる。

(調査では、県内の全数に近い公共図書館から、アンケートへの回答、質問事項への回答、資料提供、写真撮影等について多大なご協力を得ました。記して厚くお礼申し上げます。)

参 考 文 献

- 1) 今村芳恵：子どもと本との出会いの場に求められる条件，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-1，p397-398 (1997)
- 2) 日本建築学会：教育・事務の動作空間，「建築設計資料集成」，p43，丸善株式会社(1986)